

子どもらが帰った後

をめぐって

子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずはとすることはひと時。大切なのはそれからである。

子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子どもの中に入り込みきって、心に一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。

子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に冷汗の流れ出ることもある。ああ済まないことをしたと、その子顔が見えて来ることもある。——一体保育は……。一体私は……。とまで思い込まれることも屢々である。

大切なはこの時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んで行けるから。

(倉橋惣三選集 第三巻 育ての心より)

ことしの梅雨は長雨となり連日降りこめられて、幼いひとたちも室内遊びを余儀なくされている。しかし、うれしいことには七月ともなれば、四月に入園した子どもたちも、それぞれの遊びをくりひろげて、子どもたちも保育者も、時の経過をしばしば忘れるほどになっている。

二、三日前に、この地域の産土神うぶすまがみの祭礼があり、子どもたちのさめやらぬ夢は、縁日ごっこの再現となって、中でも人気は、たこやき、金魚すくい。その製作が中心となっている。金魚は駅などで売っているみかんの入った赤いあみ袋、その中に不用になったビニール袋を詰めこんで、尾のところを輪ゴムでとめるだけで、金魚らしくなった。金魚すくいの金魚は多いほどよいと思って、一つのみかから金魚を二匹とろうと、長い尾を切りとってしまい、次に材料のあみを二等分して子どもたちの前に供した。ところが、もう尾を切らなくても丁度よい長さだと思ふのに、子どもたちは私を真似てみんな尾にはさみをいれてしまので、頭でかちの不格好な金魚になってしまった。"年長児がこれを金魚と思ってくれるかしら"と、子どもたちが懸命につくっているだけに、よけいなことをしてしまつたと私は気がかりになった。

りんご箱でつくった屋台の前に七、八人の子がいすをならべ、岩波おはなしの本を小脇に抱えて順番を待つようすでおとなしく

腰かけている。屋台には、籠一ぱいぎっしりとビールの王冠が盛られているだけである。何だろう。

「お医者さん、ごっこ？」

「うん。銀行ごっこ」意外な声が返ってきた。なるほど。ポナスシーズンではある。順番を待つのはお医者様の待合室と限ったことではない。勢力家の二人が屋台の向う側にひかえ、ビールの王冠のおかねをひき出し、また預けにくるお客さんに応待している。小脇に抱えた岩波おはなしの本は預金通帳なのである。本の中でより薄い岩波の本を選んだ即妙の知恵に感じ入っていると、T男が、

「先生、雨、ふっている？」

とたずねにきた。雨は音を立てて降っているというのに。T男は、ここ数日同じことをききにくるので、昨日は窓際に連れていき、「ねえ、あの水たまりの水が動いているでしょう、今、雨が降っているからなの」と教えたはずである。で、つい、「水たまりの水が動いていたでしょう？」と冷たくいつてしまったが、彼は無言であった。

子どもが帰ったあとで――

室の掃除をしていたら、こんな金魚がみつかった。赤いあみは長いまま使い、尾の長い部分はくるっと巻いてセロテープでとめ

てある。稚拙ではあるが、いかにもヒラヒラと泳ぎそうな金魚に見えて、金魚でひっかかっていた私の気持ちはこれで救われた。

子どもの方がずっと創作的である。銀行やビールの王冠は、赤いのと水色のと色別に苺の空箱にきれいに整理して入れている。キリン、あさひなどの字は読めなくとも色で選別し、ごちゃごちゃでなく整理したあたり、いかにも銀行らしく何とほほえましいところか。

おやみなく降る雨あしと、雨に溶け込みそうな美しいあじさいの花色に目をとめていたら、

「先生、いま雨、ふってる？」あのT男の声が耳の奥に甦ってきた。ああそうだったのだわ。毎日のように「先生、いま雨、ふってる」と聞きにきたのは、雨が早く晴れてほしいという願望が心の底にあって、救いを求めるように私に話しかけてきた大切な言葉であったのだった。

「そうね、先生も『早く雨、やんどくれ』と思っているの」と、なぜ言葉を合わせてやれなかったのであろう。実際この長雨では、雨の上がることを待ち望むのは、誰も共通の願望であるのに。水溜り云々と冷たい言葉をつらねて、T男の心の底の声をききとれなかったすまなき、つまりは私の心が四歳の子どものとき合うにふさわしい柔かさを持たなかったことに起因している。現

実的、現象的なものにむしばまれてゆく大人の心を見すかされて倉橋先生はこの一文を草されたのであろうか、否それよりも、私のような平凡な保育者であっても実行できることであり、子どもが帰ったあとのこの反省こそ、明日も、また、子どもの世界に旅立ってゆくことを許される、平凡な保育者であれば、唯一のパスポートであることを、暖かく指示してくださった座右の銘ともすべき行文であらう。

(東京家政大学附属みどりが丘幼稚園 川崎 千束)

――動から静へ――

子どもらが帰った後、保育者の世界は転換する。そのきりかわりは、「動から静へ」あるいは「外から内へ」という形で、とらえることができるかもしれない。

子どもたちは、動きの世界に生きる。「動くこと」によってみずからを語り、「動くこと」によって世界を把握する。それゆえに、保育者とよばれるおとなにとっても、子どもらと共にあるときは、「幼児と共に動く生」を共有しなければならぬ。保育者の目と手と足は、誰よりもいきいきと、誰よりもこまやかに、動いていねばならないのだ。

しかし、子どもたちはいま、帰っていった。ガランとした保育

室は表情を変える。さっきまでの、あの活気に満ちたざわめきも、汗ばんだ肌や輝く瞳との出会いも、もうそこにはない。そして、静かに、「おとなの時間」がやってくるのである。

さっきまでの動きの中で、肌を通してしみこんでいたさまざまなもの、ゆっくりとよみがえってくる。思いがけない形で心の深みから顔を出して、自分自身をすら驚かすような不思議な情感や、理解し難いイメージもある。「あのときは、そんなことを感じていたはずではないのに」と戸惑うようなことすらあるだろう。しかし、それらのすべては、誰のものでもない自分の体験なのである。

その一つ一つを静かにみつめ直そう。そして、それを「おとなのことば」でつかまえることをしたとき、そこに生まれるのは、自分のことばが語られた自分自身の保育記録であり、保育理論である。反省とは、「こうあるべき」というモデルに当てはめて、自分自身の足りなさを省みることだけではない。自身ですら気付いていない自分と出会い、そんな自分を明日の保育者へと上手に導いていくための自分なりのでだてを、誠実に、偽りなく見つけ出すことも、重要な反省の一つにちがいない。子どもと共に生きる日は、何よりも「新しい自分」を見つけて出させてもらえることのない機会なのである。

(お茶の水女子大学 本田 和子)

「子どもらが帰ったあと」見つけた！「育ての心」の中に。もつとくどくどと書いてあると思つたのにたったの十行。それを何回も何回も繰り返し読んでみました。

私がいくら読んでみても「子供が帰った後」という言葉が鮮明に残ってこないのです。私にとって「帰ったあと」よりも「子どもの中に入り込み切つて、心に一寸の隙間も残らないただ一心不乱」の方が、強く私にせまってきました。私が今一番大切にしなければならぬことはその「子どもと共に一心不乱に」なのです。その時こそ「子どもが帰ったあと」が意味のあるものになりそうです。

今、私の手から子どもはすべて去つてしまつた。夏休みに入り、子どもはそれぞれの居場所に戻つていったのだ。もうお部屋には、子どものおいすら残つていない。最後の日、子どもたちとよい別れをしただろうか。

私の力では、決して子どもたち皆に充分な満足を与えられるような保育はできない。けれど一日をさわやかに終えること、そのために一心不乱になることを忘れてはいなかつたらうか。翌日、保育があれば私はこう言いのがれるでしょう、「明日があるさ」。しかし一日一日が子どもにとって貴重な日々なのです。おとなの一日と子どもの一日、決して同じではないでしょう。それなのに、

子どもが帰つてからでもできることを次々と見つけ出し、先生である私は忙しげに、子どもから遠ざかる。そして、離れてしまつては追いかけていく。こんなことでは息が切れてしまいます。こちらで待つてゐるだけの余裕がほしいのです。せめて帰る時ぐらゐ、私の心から、子どもたちと別れを告げたいのです。

これも皆、子どもが帰ったあとのたわごとです。子どもと一心不乱に一日の保育を終えて考える「子どもが帰ったあと」の反省は、翌日一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んで行けるものでしょう。しかしそれが「たわごと」に終わつていくかぎり、明日につながりそうにありません。明日につながるには唯一つ、子どもの中に入り切つて、ただ一心不乱。子どもは永遠に離れてしまうものではないようです。「子どもが帰ったあと」また「子どもは帰つて」くるのです。

「子供が帰ったあとからは、丸い大きなおつきさま……」にこにこお月さまが新しい出会いを待つてゐるかのよう……。

(お茶の水女子大学附属幼稚園 河井 祥子)